

# 修 験 道 調 査 研 究

望 月 一 靖

この調査報告は所報第2号において、述べたように祈禱の問題に関連しての修験道の調査報告である。

現代の本宗の信仰のあり方において二つの立場がみられる。一つは教義を中心として、宗教的価値の追求を知的レベルで受けとめ、これを合理的に理解し、了解しなっとくをして信仰生活を行う立場と、儀礼を中心として感覺的・體的經驗を積みあげることに、よって宗教的価値を追求しようとする立場である。この二つの立場はそれぞれ意識の底流の中に互に相手を否定しあい、矛盾するものとして鋭く対立していると考えられる。ことに現代では、知的に合理的に——宗教的合理性ではあるが——宗教的価値をとらえようとする傾向が強く、感覺的・體的なものを見下す傾向があるといえよう。しかも問題であるのは、感覺的・

體的な宗教的価値の追求を志ざしている人達、例えば荒行に入行している人達の中にもこの傾向がみられることである。ひるがえって考えて見ると日本の仏教の中からこの感覺的・體的な要素を取り除いてしまつては、そこに、残るものは一体何であろうか。本宗における布教のいきづまりという現象もこのような点からの反省・再検討が必要である。

このようないみでわれわれは「祈禱」のもつ問題を新しい角度から、その今日的意義を明らかにしたいと考えた。そのため、調査対象として修験道を選んだのであるが、その理由は、1、本宗の祈禱を研究するためには、日本的密教的性格をもつた修験道が最も古く、そのなかに原型となつているものがあると考えられること。2、修験道の修行

が、甚だ特殊なものであり、非日常的な厳しい行為を通して感覚・体験に働きかけるものであり、これは本宗の荒行と共通のものをもつと考えられる。3、修行に参加しやすい等があげられるのである。

以下のレポートは、修験道の奥馳け修行に参加し、非日常的な激しい行為をくりかえすことによって、参加者の態度、意識行動のうえにどのような変化が見られるかに重点を絞って研究した。

宗教を信仰するという目的の一つに、その宗教の理想とするパーソナリティに到達しようとする考え方があつた。多くの宗教はそのために定まった方式による修行の方法が決められており、それを遂行することによって理想的な境地に到達出来るものと考えている。その理想的境地に到達した人格を「聖者」「聖人」と呼ぶのであるが、このような聖者、聖人の域に到達しないまでも、宗教修行をすることによって、パーソナリティ構造に何等かの影響があることは考えられる。このような宗教的人格についての研究は、W. Jamesの「宗教経験の諸相」の中で聖者性の特徴として、一・現世の利己的な小利小益の生活よりも、もっと広大なる生活を営んでいるという感、一つの理想力の存在を

知る確信よりも、これを感じるという確信をもつ、二・理想力がわれわれの生活と親和して継続するという感じ。理想力の支配に向い、われわれが進んで自己屈従するという意志作用、三・閉鎖せる自我性の輪かきが融けるに伴って無限なる意気軒昂および自由、四・感動的中心が移動して親和また調和せる愛情へと向い「然り」という肯定へと向い、無我の要求が関係する否定より遠ざかること」<sup>⑩</sup>の四つをあげているのはあまりにも有名である。これはW. Jamesが多く宗教者が残した自伝、手記等を中心として分析し、回心の結果として獲得した聖者の性質としてあげたものである。このような例をみるまでもなく、宗教信仰者は宗教を信仰しない人と比べてそのパーソナリティの構造の中に違ったものをもっているということ、また、信仰する宗教によつてもそのパーソナリティ構造に差異がみられることは多くの研究が指摘する所である。このような違いをもつたものを宗教性人格と呼ぶならば、この宗教性人格を形成するその要因は、その宗教の教義、儀礼、およびそれが社会の中に存在するそのあり方などがあげられるが、ことにその中心をなすものはその宗教によつて定められている「修行」であると考えられる。ことに日本においてはこの修行をするということが、精神修養と同義に考えられ

修行を通して人格形成をおこなうものと考えられているということは R. Benedict が指摘するところであるが、<sup>③</sup>このような社会的基盤の中では宗教的人格の形成の大部分が修行のあり方に要因があると考えられよう。

さてそれでは修行とは何かということであるが、岸本英夫は「宗教現象の諸相」の中で「行を広義に解する場合に、それが心を鍛えるという目的達成の手段として活用される限り、如何なる種類の行為をもその中に包含する。しかし狭義には、とくに、心を鍛え、理想を体験の上に実現せんとする目的をもって、どれ程か組織的に営まれる身体的な行為動作に限られる。その意味では、行は、身体を通して心を鍛える営みであるということも出来る」と定義し、なお「心を鍛えるということもその意味は広い。理論的な問題に対して、思考を廻らし、推理力を練る知的な営みも、一つの心の鍛練である。喜怒哀楽の情や、美醜の感の激しい刺激を透過して、心を磨き、情操の洗練涵養をはかるのも、心の鍛練である、しかし、行は、それ等とは究極において同じ効果を狙うにしても、先づ身体に働きかけることによって、それを実現しようとするところに特徴があり、その点で純粹な精神的方法に對立し、これと並行することになる」としている。<sup>④</sup>修行に對する規定づけには

多くのものが見られるが、この規定付けは、修行によっておこなわれる身体的行為が、宗教的態度、信念、あるいは宗教的人格を形成させるものであることに注目した一つの代表的なものといふことができよう。

われわれ今回、一・修行がパーソナリティ構造の変化を生じさせる重要な役割を果すこと、二・パーソナリティ構造の変化——宗教的回心、あるいは、信念、態度の変化を含めて——ははげしい情緒興奮に伴なってひきおこされることが多いこと、三、さらにそのような情緒興奮は身体的疲憊状態、あるいは強度の疲労によって生じやすくなるということなどに注目し、その事実を確かめることを考えた。このためわれわれは様々な角度から検討した結果、<sup>④</sup>次のような一・既成の宗教教団であり、日本の文化と深い関係のある教団であること、二・修行は、厳しいものであり、心的身体的疲労がはげしいと考えられるもの、三・その教団の信仰者以外のものでも比較的容易に参加できると、四・ある程度心理学的な測定が自由に出来るものであること、などを考慮して、修験道の奥馳け修行を選び、これに参加してその修行とそれにもなう疲労の測定、ならびに、心理的な変化を検証することを試みた。

註 ① W. James Varieties of Religious Experience 比屋根安定

記 P二七八～二七九

② R. Benedict: *Chrysanthemum and The Sword.* 長谷

川松治訳 P二六三～二九一

③ 岸本英夫 宗教經驗の諸相 P一〇四

④ 望月一靖 立正大学人文科学研究所紀要六号

## 一、方 法

被験者として男子大学生九名、高校生一名計十名を選んだ。この十名の中で、参加の依頼をするときに、あらかじめ修験道の奥馳修行の意義、今回の奥馳修行の参加の理由等々をよく説明しあらかじめ何等かのみで心構えをつけさせた者達と、このような心構えを検査者の方で積極的につくらせるようなことをしなかった者、たとえば、「一寸つらいハイキングであるが、おもしろいから参加しないか」「相当険しい山であるが、山登りが好きならばおもしろいところだ」「景色がよい所である」「日本で唯一の女人禁制の山であり興味があると思う」というような誘いかけだけで参加させた者達の二つの群に分けた。これは、このような心構えが、あるものと、ないものとは心理的な変化に大きな差があるという報告がありこの点の検証のため、この二つのグループに分けてみた。しかし奥馳けに参

加中は一緒にしすべて同じ条件のもとで行動させた。奥馳け修行に参加したわれわれのグループはこのような学生十名、および検査者五名の計十五名であった。

次に疲労の測定方法であるが、この疲労という現象に対してはまだ心理学的には不明瞭な部分が多い。それは疲労の概念がはっきりしないためである。疲労が問題にされるべき第一に考えられることは体験としての疲労感「私はつかれた」という甚だ主観的なものがある。同時に疲労は生理、身体的な変化としてあらわれる疲労現象がある。この主観としての疲労感と生理・身体的な疲労現象とは必ずしも一義的な一対一の対応をなしていないことが多い、即ち「疲れた感じ」が大きい時でも生理・身体的疲労現象から見れば余り疲れていると見られない場合もあり、逆に、疲れた感じが余らない時でも、生理・身体的には疲労していると見られるような資料が測定されるということもある。このように主観的な疲労感が、必ずしも身体的疲労と一致しないことが、疲労研究の一つの隘路となっているのである。従来疲労の研究は主観的な疲労感から出発したのであるが先のような事情から、現在では疲労の研究は、このような主観的なものから離れて客観的な生理的・身体的変化に重点がおかれ、主観的なものはこれに対して従属的なも

# 身体徴候調査

記入月日 昭和 年 月 日

姓 名

年 令

次の各項のうちあてはまっていると考えられるものに○をつけて下さい。

1. 軽い頭痛がする。
2. 食欲がない。
3. 何もしないのに汗がでる。
4. 頭の中でジーンと音がきこえる。
5. 声がかれる。
6. やたらにねむい。
7. あくびがふだんよりよくでる。
8. 体や手足のすじがひきつるようだ。
9. いきぎれがひどい。
10. 耳鳴りがする。
11. まぶたがびくびくする。
12. 手足をうごかすのがおっくうである。
13. 一度坐ったら立つのがいやだ。
14. 体のどこかひどくこったり、いたい。
15. 立ったり、歩いたりするとよろよろする。
16. 何か特別のものがたべたい。
17. よく物を忘れる。
18. 人と話をするのが面倒だ。
19. 考えごとをするのが面倒だ。
20. 一人だけになつていたい。
21. 物事や人の話しごえが、かんにさわつてうるさい。
22. 物事がやたらに気になったり、時々不安でたまらなくなる。
23. 気短になっているようだ。
24. 注意の集中がむずかしい。
25. 口の中に何も無いのにへんな味がする。
26. 目をとじると小さい星がちらちらうごく。

次の各項についてやや感じるときは○、はっきり感じるときは◎、その他は横線でけて下さい。

体が軽い。調子が良い。 脚(左・右)がだるい。 腕(左・右)がだるい。 手、首、指がいたい。 腰がだるい。背中がこる。 体がだるい。首すじがこる 全身がだるい。 立っているのがつらい。 頭がさえている。	眼を動かすと重い。 ものがはっきり見えない。 頭がのぼせている。 モヤモヤしている。 頭がおもい。頭がいたい。 判断がにぶい。 考えごとがまとまらない。 体の動きがにぶい。 気分が良い。すがすがしい。	張り切れない。 元気がでない。 仕事をしたくない。 もう少し休みたい。 あきた。気がちる。 気分がおもい。 何か気晴しがしたい。 いらいらする。 気がたっている。
---	--	---

表 1

のとなつてしまつてゐる。しかしこの客観的資料は疲労そのものではなく、疲労を推定する資料にすぎないものである。そこで、現在では、疲労とは生体の種々な変化から推定される一つの抽象された概念ということになつてしまつた。④このような事情から現在では疲労状況を調べるためには一・機能的な面——体力的、感覺的、精神的な面における変化、主徴候の検査、二・行動的な面——動作の変化、姿勢の変化、能率の変化などの測定、三・身体的な代謝の変化等を検査しなければならない。

われわれは、今回の踏査対象が修験道の奥馳け修行であり、そのため例えば山の中で測定しなければならないなどの甚だ制限された状況であると考え、その測定の方法を、一・従来から疲労測定に用いられ結果資料がわかつてゐるもの二・測定が簡単であること、三・結果をうるための処理が簡単であること、四・測定器が軽量で持ち運びに便利であることを条件として疲労度判定の資料として次のようなものを採用した。一・フリッカー値の測定——竹井式ポータブル型フリッカー測定機を用いた。二・皮膚電気抵抗の測定——ハンセン八五型抵抗計精度士〇・五%を用い、電極としては直径約十耗の銀板、食塩糊を用いた。測定部位は、左手示指および薬指の第一関節内側を測定のためこ

とに、二八%消毒用アルコールにて洗滌し、この間の抵抗を測定した。三・体重の測定——ポータブル型体重計、四・下肢大腿部周囲長の測定、五・血圧の測定、六・脈膊の測定、七、尿中の糖量、蛋白量の測定——いづれも検査紙を用いた。以上を生理的身体的な徴候を知るための方法とした。この他に、表一のような身体徴候調査表<sup>⑥</sup>を配りこれにチェックすることにより主観的疲労状況を調査し、さらにこの奥馳け期間中の各人の外面に表われた疲労徴候を観察し記録した。以上のようなものの結果を総合して各人の疲労状況をより正しくとらえることに努力した。

心理的な変化をみるために多くの人格検査を使用してさまざまな観点からこれを観察することが望ましいが、今回は前述のような制約があるため、投影法による検査はほとんど用いることが出来ず、このためパーソナリティ検査としては日本版MMPI、および、集団用ロールシャッハを用いた。また、その他、奥馳修行におけるさまざまな話し合い、討論および、修了後におけるインタビュー等を通して推定せざるを得なかつた。

註① 産業疲労検査の方法 労働の科学特集 一九五二、VOL

七、No. 六

② 労働研究所紀要国有鉄道研究所VOL——

## 二、奥馳修行と検査状況

奥馳修行および種々な検査状況は次の通りである。

今回の「大峯山逆峯奥馳け」は奈良県吉野郡吉野山、大峯山護持院・大峯山行者講社本部校本坊の主催によるものである。

前述のように、信仰とは、その宗教のもつ理想とそれをうらづける教義理論とが、パーソナリテイの構造に影響し、それが外面的な力としてあらわれてきたことを呼ぶのであるがそのような信仰の境地に到る道、修行方法はいろいろある。修験道の修行は一般に山嶽修行を主としたものである。山嶽修行とは日本に古来から伝わる修行方法であり、山という自然環境を利用してそれを行場として修行する方法を呼ぶのである。現在日本で山嶽修行が行われている場所は数多いが、その中でも東北地方における出羽三山羽黒山・月山・湯殿山とこの紀伊半島を縦走する大峯山脈の二つは余りにも有名である。自然的なものである山を修行の場とする意義には次のようなことが考えられよう。

- 一・山は、それに登る以前に、大空に聳えたつその雄姿は修行者に崇高感、神秘感、畏怖感を与え憧憬の念をいだかせる。
- 二・山に登れば、世俗のわづらわしさから離れ、幽

寂とした無人の境であり、社会の人間関係から離れた自然の中で一個の小さな人間としての己れを見出す。三・山頂より見るその景観は、自然と修行者の心を啓発し、また自己反省をうながす。四・同時に山は一寸した道のりと違い天候の変化によっては直ちにそれが修行者の生命に關係し、一歩たりとも緊張をゆるめることは許されない、以上のようなことが、山を修行の場とすることの意義として考えられるが、それが山の峯廻りとなるとその意義は更に深くなる。修行の場としての山とそこで修行する手段としての「歩く」ということが結合して大きな効果をうみだす。日常生活においては歩くということはその殆んどは無意識な反射的な動作にすぎないが、修行の場としてあるような険しい山道を疲労にうち勝ち、木の根、岩角をつかみ一歩一歩登る時は、その状況の中ではもう無意識的な、反射的なものでなく、一歩一歩が意識され、努力し、歩くということに意識が集中される。歩くという簡単な動作を意識を集中して繰り返さず。それも長時間に亘ってくりかえす時そこには雑念をとり去った新しい心が生れるということが考えられるのである。これは日本の民俗信仰と合致した修行であり、古くから行われてきたものであるが、神仏習合以来、これと仏教が融合した修験道の修行方法となってい

るのである。

さてわれわれの参加した大峯山奥馳修行は奈良県吉野山の藏王権現より、紀伊半島突端の那智大権現に至る、一五〇〇米から最高一九〇〇米級の山々を踏破し、七五ヶ所で勤行をおこなうのである。しかし現在の桜本坊の行う大峯奥馳は、数年前の台風のため前鬼より那智に至る間にある宿坊が、破損しその後修験者その他も余り通らないためコースも不明となっているため、吉野山より前鬼口まで踏破、前鬼口より那智まではバスを利用してゐる。また修験道の修行である六道転廻をかたどった、〃穀断ち〃飯をたべないこと〃角力〃〃無言行〃はいろいろの事情から行なっていないかった。

昭和四三年七月二十三日午前三時吉野山桜本坊出発のため、われわれは七月二十二日午後一時に桜本坊に集合、午後五時〜八時までの間に奥馳を行う以前の状態を、奥馳け終了後の資料と比較し考察するための基礎とするため測定した。その測定したものは、MMPI・をはじめ、体重、尿血糖、尿蛋白質量など、計画したすべてのものをおこなった。

二十三日午前二時半起床、疲労測定のための生理的検査として用意されたものを測定、三時半出発した。この日の

走行距離は山上ヶ嶽の裏行場を含めて約四〇軒、午後四時に到着、疲労検査を行った。なおこの日起床より午前一杯は食物をたべなかった。また二時間位無言の行を行った。この日は登行の初日でもあり、午前中の穀断ちいわゆる絶食もおこなったためか、非常に疲労が激しかった。

二十四日午前三時起床朝の勤行―摩訶槃若心経一卷および大先達による祈禱の後、四時出発、途中約十ヶ所の霊場にて勤行、午後四時弥山に到着した。走行距離約二五軒、到着後疲労検査を行い、夕刻から八時まで、大先達を交えてデイスカッションを行った。

二十五日午前二時起床、朝の勤行の後午前三時出発、途中十数ヶ所霊場にて勤行参拝、午後四時前鬼に到着、疲労検査をおこなった。

二十六日午前三時半起床、前鬼より前鬼口まで歩行前鬼口よりバスにて終着、那智、青岸渡寺に午後五時到着し、疲労検査を行った。

その後翌二十七日バスにて吉野に戻り話し合いの後、解散した。

奥馳修行は以上のようなようであったが、強力ちからの都合と荷物ものの重さの関係のため、フリッカー測定機を携行することが出来ず、フリッカー値の測定が出来なかったのは残念であ



る。また当初の予定としては、奥馳修行中、朝、昼、夜と  
きめ細く疲労測定を行う予定であったが、時間的制約と、  
参加者の疲労激しく、予定通りに資料が得られなかったの  
は残念であった。なお今回の奥馳修行は、大先達巽良乗、  
先達高田保雄、巽良雄を中心として、総員二十五名であり  
われわれの側の参加者は総計十五名である。

### 三、結 果

表二は測定の結果をまとめたものである。この表は奥馳  
修行前即ち桜本坊にて二十二日に測定したものと、二十五  
日前鬼にて測定した、体重、血圧、脈膊、大腿部周囲長、  
皮膚電気抵抗、尿中精分量、蛋白質量を比較したものであ  
り、また MMPI は二十六日青岸渡寺で検査したものであ  
る。

MMPI は各 Scale を阿部満洲の標準化に従って T ス  
コアにかえたものである。この MMPI のプロフィールを  
見ると、奥馳修行参加前とその後とでプロフィールの変化が  
認められるもの、E、J 少々変化があまり同時にプロフイ  
ルの特徴が強調されたと見られるもの C・H・I・I・殆んど  
変化がみられなかったもの A・B・D・F・G の三つの  
群にわけることが出来る。その変化の一つ一つについての

細かい検討は省略するが、大局的に観察すると一般に Pd  
Scale に変化が見られた。

さて前述のように MMPI のプロフィールの変化を指標に  
三つの群に分けると変化の激しい順に生理的な疲労の各々  
の指標とくに、尿中の糖量、蛋白量、並びに皮膚電気抵  
抗、体重等に関連した動きがあることがうかがえる。また  
プロフィールに変化のみられたグループは身体徴候検査の質  
問に対しても、修行の前と後では各項目に対して一般的に  
チェックの数が上昇することが見られた。こゝで重要なこ  
とは我々が被験者に参加を依頼するとき、ある程度の方向  
づけをおこなったグループと方向づけを少しもしないグル  
ープの二つにわけたことは前述の通りであるが、プロフイ  
ルの変化を見ると、最初に方向付けを与えた方のグループ  
と変化が見られたグループとは重なりあっていた。また、  
他の条件が同じでも方向づけがないと変化しにくいことが  
見られた。ここでは例えば D・I の例がそれである。

### 四、考察とまとめ

宗教の修行が、定められた方法にしたがって修行するこ  
とにより、身体に影響をあたえそれを通してパーソナリテ  
イの構造に変化を与えることを目的とするのであり、この

Y P	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J										
	22日 25日	22日 25日	22日 25日	22日 25日	22日 25日	22日 25日	22日 25日	22日 25日	22日 25日	22日 20日										
I 体重 kg 血庄 脈膊 / m 大腿部周囲長 cm 皮膚電気抵抗 Km 尿管中糖蛋白 尿管中蛋白質	50.0	50.0	57.0	56.5	57.5	56.5	56.5	48.0	45.0	48.0	47.0	48.0	56.0	55.0	56.0	52.0				
	100.0	106.0	132.0	130.0	108.0	110.0	110.0	120.0	116.0	123.0	102.0	126.0	120.0	164.0	160.0	130.0	123.0			
	58.0	60.0	78.0	87.0	72.0	80.0	68.0	70.0	68.0	70.0	54.0	68.0	75.0	100.0	100.0	60.0	50.0	80.0		
	89.0	88.0	84.0	85.0	82.0	84.0	80.0	90.0	104.0	110.0	68.0	78.0	84.0	70.0	76.0	70.0	72.0	64.0	70.0	
	46.5	47.5	47.3	48.0	51.0	52.5	48.0	50.0	49.0	52.4	45.5	49.2	51.4	5.3	46.0	60.0	63.0	40.0	45.0	
	65.0	50.0	50.0	60.3	5K	48.0	60.0	80.0	110.0	180.0	102.0	112.0	10k	150.0	120k	200.0	80.0	120.0	60.0	190.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
II H s D H y P d M f F a F t S c M a S i 不安	44.0	56.0	51.0	42.0	37.0	55.0	58.0	62.0	20.0	48.0	62.0	55.0	58.0	35.0	49.0	37.0	37.0	55.0	52.0	
	62.0	50.0	45.0	40.0	43.0	33.0	43.0	40.0	35.0	50.0	75.0	38.0	41.0	41.0	49.0	30.0	25.0	51.0	51.0	
	57.0	52.0	64.0	44.0	43.0	52.0	52.0	60.0	52.0	54.0	67.0	48.0	49.0	45.0	52.0	35.0	45.0	99.0	49.0	
	43.0	36.0	43.0	42.0	48.0	38.0	48.0	32.0	62.0	43.0	57.0	45.0	39.0	60.0	56.0	30.0	18.0	40.0	53.0	
	52.0	50.0	60.0	50.0	60.0	48.0	28.0	28.0	40.0	45.0	38.0	38.0	38.0	55.0	70.0	40.0	39.0	50.0	60.0	
	37.0	34.0	42.0	50.0	48.0	48.0	48.0	46.0	33.0	35.0	60.0	50.0	53.0	50.0	78.0	33.0	35.0	58.0	65.0	
	38.0	35.0	52.0	70.0	21.0	38.0	40.0	40.0	27.0	45.0	60.0	63.0	30.0	30.0	55.0	72.0	39.0	28.0	63.0	
	40.0	37.0	44.0	48.0	40.0	50.0	40.0	40.0	38.0	45.0	62.0	63.0	25.0	25.0	51.0	72.0	38.0	72.0	75.0	
	32.0	32.0	48.0	42.0	62.0	68.0	62.0	68.0	42.0	44.0	53.0	58.0	30.0	27.0	33.0	65.0	28.0	20.0	62.0	
	42.0	42.0	45.0	53.0	40.0	45.0	40.0	45.0	35.0	35.0	52.0	62.0	30.0	26.0	48.0	53.0	33.0	24.0	60.0	
20.0	14.0	12.0	10.0	14.0	23.0	14.0	23.0	22.0	15.0	18.0	33.0	19.0	15.0	24.0	31.0	10.0	14.0	15.0	15.0	

ため、そこには身体的要因と心理的要因との間に複雑な関係がある。宗教修行を解明しようとするとき、当然この二つのかかりあいがある問題点となることが考えられる。このような点の解明の一助として、修験道の山嶽修行をとりあげて、奥馳修行に参加し、以上のような結果を得た。これを要約すると

一、修行中の討議あるいは面接等によって、修行前と後では「私は少し変わった」という自覚をもった者、又はそのような観察をうることが出来た者——この変化が一時的のものであるか或は持続するものであるかは別として——と、MMPI のプロフィールの変化した者とは重り合う部分が多かった。

二、MMPI のプロフィールの変化した者の多くは、疲労検査の結果疲労が多いと認められる者であった。

三、修行の意味、修験道の信仰等についてあらかじめ説明をし、納得させてから参加した者とそうでない者とは前者の方に変化を感じた者が多く、MMPI も変化がとられた。

四、疲労は、体重の減少皮膚電気抵抗が増大する尿中の糖分、蛋白質量の増加としてとらえることが出来るが、しかし、これと被験者自身にする主観的な疲労感とは必ずしも

一致しない。

五、MMPI の変化は、pd にとくに変化が見られた者が多かった。

六、修行に参加した目的がはっきりしないもの、例えば修業前に参加理由をきいた所山登りが好きであるから、などと答えた者は疲労の徴候があらわれても変化しないものが多かったことが見出された。

以上が今回得られた結論であるが、しかしこれはまだ問題がある、それは、

一、疲労とパーソナリティの構造の変化との関係はまだまだはっきりしていない。①

二、宗教的人格についてははっきりした概念規定はまだ充分にはおこなわれていない。そのためこのとらえ方およびパーソナリティ構造の変化をどのようにとらえるかが問題である。

三、結果の要約の三において述べたように、変化が見られた者は、参加の意義を説明したため、これが暗示効果をもみだしているのではないかと考えられるが今回の調査のみではこの問題をはっきりさせることは出来なかった。

なお昨年の予備調査が不充份であり、奥馳は予想より甚だ厳しいものであったため、予定した検査の中で重要なも

のをばかざるを得なかった。例えばポータブル型ブリックカー測定機が重く携行出来なかった。またロールシャッハ検査も奥馳中は時間の関係上使用出来なかったなどのため、また検査者自身が相当に疲れてしまったため、予定した通りに検査を行なえなかった。このため問題をまだまだ充分に解明することは出来なかった。この次の機会に以上の点を十分に勘案したうえ、この問題を更に追求するつもりである。

この報告は昭和四十二年十月予備調査を行い、昭和四十二年七月二十三日より同二十七日迄の大峯山奥馳修行参加の際に得た資料を中心にした「修行の心理学的研究」の第一報告である。資料の未整理部分があるため、整理終了次第、何かの機会に更に追加報告するつもりである。

この調査の結果からは、まだ問題点が前述のようにあるため多くのことは語れないが、少くとも次のことは一つの事実としていうことができるのではないかと考えられる。

それは、このような、修験道の奥馳け修行あるいは、本宗の荒行修行、または、修行道場における修行などにおいて、それが、日常的でない特別な状況のなかである定まった儀礼的行為をくりかえして行うということは、心理的な

面に大きな影響があるということ、しかし、それが、態度行動に変化としてあらわれるものが、その修行目的に向うような変化であるか否かはその修行をする以前の、修行に対する態度に大きく左右されるということであり、これはこのような修行を行い、または行わせたりするときの大きな問題であるということができよう。

最後に、このような検査を含めた調査はいままで余り行なわれたことがなかったが、今回われわれの主旨の説明を聞きいれ、われわれの参加を快諾し、いろいろと便宜を計かって下さった、大先達、巽良乗師、奥馳中落伍しそうなわれわれをかばって、全コースを走破させて下さった、先達高岡保雄師・巽良夫師に感謝するとともに、共に同行し検査の実際を引きうけて下さった東京医大吉山直樹氏、同僚である井上隆二、望月哲也氏に感謝致します。